

学校とは⑦子供の声

私は、担任時代「子供たちの教室の最大の環境要因は、担任である」という教えを胸に、子供たちと接していました。しかし、子供たちの中には担任とのソリが合わず、「先生のことが嫌」「キモい」「ひいきする」「話を聞いてくれない」などと不満を口にする子も出てきます。もし、我が子がこういうことを言い出したら、どうしたらいいのでしょうか？

先ず、やらなくてはならないのが、前回の「学校とは⑥」で紹介した「共感」することなのです。「そうなんだ。それはイヤだね」「そういうことに頭に来たんだね」と共感的に聞くことです。共感してもらえれば、子供は自分の中にたまっていた不満や愚痴をたっぷり話すことができます。それがストレス解消にも繋がり、親に対する信頼感も育ちます。共感することで、子供から様々な情報を得ることができます。そして、最後に「話してくれてありがとう。」と言うと、子供の安心感になります。

共感できなかった失敗談の例を聞くと、子供の気持ちを否定することが多い様です。例えば、「そんなこと言っちゃダメだよ。」「あなたが〇〇しないからでしょ。」などと言われると、子供は「自分の気持ちはわかってもらえない。言ってもムダ」「逆にお説教される」と感じて、口を閉ざしてしまいます。他にも、子供の不平不満を聞いてすぐに「気にしないでいいよ。」「大丈夫。すぐ慣れるよ」と励ましたり、「先生はともかく、あなたが〇〇すればいいじゃない」とアドバイスしたりするのもよくありません。子供が不満だらけの世界にいるときに、素直にアドバイスを受け入れる心の態勢になっていないからです。



ここで一つ気を付けて欲しいことが、共感を通り越した安易な同調です。「やっぱりあの先生のやり方は変だよね。」「よそのお母さんも、『あの先生はおかしい』って言ってたよ。」などと口にしてしまうのは、子供の気持ちが安らぐどころか、より激しくより否定的な感情に火を灯してしまいます。そもそも子供が言っていることがただの行き違いによる勘違いである可能性もありますので、余計な事は言わない方がいいのです。

また、前号でも書いたように、不平不満を出し尽くし、子供がすっきりとした顔に戻ったタイミングで、一緒に解決策を考えます。策を考えていく中で、「大丈夫だよ。きっと何か理由があると思うよ。」「先生もあなたのことを思って言っていると思うよ。」「先生はあなたのことを〇〇(プラスな言葉)って言ってたよ。」などの励ましやアドバイスをしてあげるのもいいでしょう。これを話もろくに聞かずに言うと、ただの「お説教」になってしまいます。

担任の先生も保護者も、「子供たちをよりよく成長させたい」という目的は一緒です。共同経営者として、「行き違い」を改善させる相談はとても大切なことだと考えます。子供を学校と家庭との中心に立てて、相互にできることを協力しながら解決の道筋を考えていきましょう。

わくわくチルドレン

2月16日に行われた、熊本県小学生新人バレーボール大会において、帯西 Jr. 排球倶楽部が、混合の部で見事3位入賞を果たしました。キャプテンの川野さんは「粘り強く戦ったけど、負けてしまったので、もっと練習して強くなりたいです。」、アタッカーの遠竹さんは「善戦虚しく負けてしまったけど、その試合はいい勝負ができ、課題も見えてきたので、練習に生かしていきたいです。そして6月の全国予選に向けて頑張りたいです。」と述べてくれました。県大会入賞おめでとう！

